

虹色
NIJI-IRO HOTARU
ほたる

永遠の夏休み

川口雅幸

Masayuki Kawaguchi

思い出

懐^{なつ}かしくて遠い 夏の思い出

楽しくて すごく楽しくて

時間が止まればいいのに

そう思った

だけど時間はどんどん過ぎ去って

いつかはみんな大人になるんだ

オレも そして キミたちも

本当は過ぎ去ってゆくのは時間じゃなく

人間の方なのかもしれない

季節が変わって 風の色が変わって

いろんな事が目まぐるしく変わってゆく

楽しかった昨日が まるで夢だったみたい

でも オレは忘れない

キミたちがいたあの夏を

キミたちと過ごしたあの夏休みを

忘れない……

最終章	第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章
永遠の夏休み	約束	決心	最後の花火	運命	思い出の蛍 <small>ほたる</small>	もう一つの夏休み
355	295	231	163	103	61	7

第一章

もう一つの夏休み

お父さんはかぶと虫とりの天才だった。

「いいかユウタ。昼間にはな、太陽の当たってない場所の木を探せ。で、傾かたむいてる幹みきの、いいか裏側だ。裏を見るとデカイのがいるもんだ。裏つてのは何なんでも見てみる価値がある。ビデオもな！ わははははっ！」

訳わけの分からない事を言う。だから適てきとう当とうに返事こたえしてると、

「ホレ、三匹目だ。こいつあマジでかいな！ わはははははっ！」

ってな具合ぐあいだ。だからオレは、いくらお母さんに頭あたまが上あがなくても、いつも変な事ばかり言いつても、お父さんを尊そんけい敬けいしていた。

だけど。今年はお父さんと一緒じゃない。

そう。もうバイクの後ろに乗のることも、変じょうだんな冗談じょうだんを聞きく事も出来できなくなったのだ。

◆

去年の夏休み最後の日。お父さんは交通事故こうつうじこに遭あつて、そのまま帰らぬ人となってしまった。あまりにも突とつぜん然ぜんの事ことだった。

事故じこは、ケータイでメールしながら運転うんてんしていた車がカーブを曲まがりきれず、お父さんのバイクと正面しょうめん衝突しょうつうしやがった、というものだった。

どっちも結構けっこうなスピードだったらしく、バイクも車くるまも大破たいはしてしまっただけ。

なのに。お父さんは死しんだのに、そいつは車の最新設備さいしんせつびに守まもられて全まくの無傷むけうであった。事故じこつたのは、そいつのせいなのに……

オレが車を嫌きらいな理由は、そこにもあるって訳わけ。

お母さんもオレも笑わらいながらお父さんの話はなが出来できるようになったのは、ごく最近さいきんになってからだ。あれからもう一年が経たとうとしている。

今年、かぶと虫とりに一人で行いこうと思おもったのは、そこがお父さんとの思い出おもい出での場所だから。毎年、夏の一番の思い出おもい出でだった、お父さんと一緒いっしょに来きるはずのこの場所に……

《次は蛭ヶ丘ダム入り口、終点です。ご乗車ありがとうございます》

無人の車内に丁寧なアナウンスが流れる。結局、終点までの間バスの乗客はオレ一人だけ。りやそくだ。こんな所にわざわざ来る人なんてそうはいない。ダムなんてただでさえあんまり行かない場所だろう。ましてや使われていないダムなんて。

「お父さん、どうしてこのダムは使えないの？」

「あーここはな、ダム自体は完成したんだが、水道設備の工事の途中で、どういう訳か打ち切りになったんだよ。だから今の水道は別の場所からの供給だな」

「ふうーん。いつかは使えるようになるのかなあ？」

「んーどうかな。国の偉い人の考えは分からんからなあ。ただ一つだけ言えるのは、こんなダム、無ダム駄！ って事だな！」

「……」

「アラ……。じゃあこれはどうだ？ ダムダコリヤ！」

「……もういいよ」

停留所に降りると、バスは一旦上の方へ行きUターンしてきたらしく、ゆらゆらかげろくに揺られながら戻ってくると、真っ白な排気ガスを残して走り去って行った。

ジ——…ミ——ンニンニンニンミンジ——…

むせ返るような熱い空気を、見事にサウンド化したような夏の音たち。

ジリジリと照りつける太陽と、深い緑だけが支配する世界。ここには、いつもと変わらない夏がやって来ていた。

歩き出すと、真っ黒な短い影が足元にくっついてくる。陽射しはまるでオレの頭上だけに照準をあてているかのよう。

風もほとんどなくて、とにかく暑い。

「あ、そくだ。電話しなくちゃ」

ポケットからケータイを引っこ抜く。今時誰も持ってない、折りたたまない洗いヤツだ。おまけに黒くて画面も小さい。ストレートタイプなんて言うとはだか格好いいけど、ただ単に古いだけ。当然だけどオレの趣味じゃない。

流れてくる汗をTシャツの袖で拭きながら電話をかける。

「あ、お母さん？ ……うん、今着いた」

片方の耳でセミの大合唱を聞きながら、電話の向こうではスーパーの店内放送のBGM。何だか妙な気分。どうやらお母さんは買い物中らしい。

《今晚、何食べたい？》

「んー…何でもいい！」

《それ、一番困るのよー。あんた、お父さんと一緒だ》

だって思いつかないんだもん。

結局カレーライスって事で話がつき電話を切る。

そう言えば、お父さんもお母さんと電話でよくこんなやりとりしてたっけ…

——「ねえ、今晚何がいい？ 食べたいものある？」

——「んーそうだな。おいしいものがないナー！」

——「それじゃあ分かんないでしょ！ 何かないの？ リクエスト」

——「何でもいい！」

——「だあかあらあ、食べたいもの言つてよもおっ！」

——「じゃあ…ヨシギユウ！」

——「一人で食つて来なさい！」

本当は皆が持っているようなカメラ付きのが欲しかった。もちろん『折りたたみ』のヤツ。だけど、オレはこの古臭いケータイを使う事にしたのだ。

と言うのも、実はこのケータイには、お父さんの声がたくさん録音されているのだ。何れもおれが借りた時に、お父さんがオレ宛てに伝言したものだ。

そう、これは世界に一つだけしかない、お父さんのメッセージ入り携帯電話。形見であり、オレの大切な宝物だ。

停留所から更に坂を上がって暫く行くと、アスファルトが途切れる。

その先はデコボコした未舗装の道、ダートってヤツだ。

バイクで走るとバンバン跳ねてケツが痛かったっけ。

そのダートを少し行くと道が二つに分かれている。いよいよだ。



ここで右の平坦な道を進んで行くと、道路脇に目印である古ぼけた小さなお地藏さんが立っている。それを基点に林に入っていくと、例の樹液の多い木があるのだが……

「ん？」

感覚的に、確かお地藏さんはこの辺りだと思っただ度そこに、お爺さんが一人ポツンと座り込んでいた。

こんな山奥で一体何をしているんだろう。

少し気にかけて、お地藏さんの姿を探しキョロキョ

ロしていると、突然そのお爺さんがニコニコしながら話しかけてきた。

「今日も暑いねえ」

白いシャツのボタンを三つ位開けて、首筋から頭にかけてハンカチで汗を拭く。にこやかではあるけど、その顔はどこか元気がない感じた。

「すまんが水をくれんかのう。喉がカラカラで困ったんじやよ」

綺麗なピカピカのハゲ頭に真っ白な顎ヒゲ。ゆっくりと話すその口調は、どこか品のいい感じがした。

一しきり汗を拭くと、横に置いてあった麦わら帽子を静かに被って弱々しくため息なんかつい

てる。大丈夫かな。

「あの……これ水ではないんだけど、よかつたらどうぞ」

リュックからスポーツドリンクを取り出し、思い切って差し出してみる。

本当はオレも飲みたかったけど。随分と弱って何だか可哀想だもんな。

「すまないねえ。坊やは優しい子だねえ」

お爺さんは、ペットボトルを受け取るや否や喉を鳴らして半分位まで一気に飲むと、

「いやあ、実に美味しい水じやのう、お陰で助かったわい。これでもう暫くしたら雨になる」

なんて言いながら満足そうに顎ヒゲを撫でた。って。

「アメ？」

「かなり強い風も吹く。嵐が来るのう。気い付けなさいよう」

この真っ青な空の、一体どの辺りから雨が降ってくるんだよ。

大体、天気予報はここ一週間ずーっと晴れのマークだったはず。

しかも今年の夏は何十年に一度かの干ばつで、水不足が心配される位に降水量が少ないって昨日ニュースで言ってたばかりだぞ。

「久々の雨、恵みの雨じやな」

お爺さんはペットボトルの残りを飲み干すと、また幸せそうにニコニコしていた。

そうか。このお爺さんボケてるんだきつと。飲みものもあげたし、もういいよな。少しは元気に

なつたみたいだし。

オレは適当に挨拶をすると、引き続き目印のお地藏さんを求めて未舗装の道を歩き出した。



「ふう……」

今の気分と同じ位重く感じるリュックを降ろし、原っぱに座り込む。さつきの分かれ道を左にぐんぐん上がった先にある、ダム全体が見渡せる原っぱ。ここは丁度木陰になっていて、一休みするには絶好のポイントだ。毎年この場所で二人してジュースとか飲んで涼んでたんだよなあ。

結局、あれから二時間くらい経ったが、かぶと虫は一匹も捕まえる事ができなかった。それどころか、いくら歩き回ってもお地藏さんを見つけれず、例の木に辿り着く事すらできなかった。「はあ、あ、やっぱりお父さんいないとだめなのかなあ……」

意気込んで来たものの、急に襲ってくる寂しさに打ちのめされ、一人、ダムのでっかい水門を見つめてボーっとする。

大自然に囲まれた巨大なコンクリートの壁。その威圧的とも言える存在感は、まるで現実の国と異次元の国とを区別する国境であるかのよう。水面には、木のでっぺんや電柱らしきものが顔を出している。

ダムは極端な降水量の少なさで、異常なほど水面が低くなっていた。

「ユウタ。このダムはな、一つの村を沈めて出来たダムなんだよ」

最初の夏、お父さんにその話を聞いた時から、オレはこのダムに妙に興味が湧いていた。ダムに沈んだ村。このフレーズを聞いただけで、好奇心旺盛な小学校低学年の男の子が、あれこれ空想するには十分過ぎるほど魅力的だった。

「ねえお父さん。今年こそはオレ、あの水門のところまで行ってみたい！」

「だーめ！ この斜面は急で危ないから、ここからは林に下りられないように立ち入り禁止になってんだぞ？」

「いーじゃん！ お父さんと一緒に行けば大丈夫でしょう？ ねー行こうよーいいでしょう？ 探検しようよう」

「んーユウタ、お前身長いくつになつた？」

「一五二センチだよ」

——「カーアツおしい！ あと一センチで合格だった、残念！」

結局去年も、何だかんだ理由をつけて探検させてもらえなかった。だけど、だめだと言われれば言われるほど行きたくなる。

かぶと虫がだめなら探検だ。身長だって去年より三センチ伸びたし、基準はクリアだろ、お父さん！

オレは、ぶら下がっている立ち入り禁止の看板を横目に、服を引っ掛けないよう慎重に有刺鉄線の隙間をくぐった。



ガガガ——ン！ ゴオオオ：ゴロゴロゴロ：ズザザアア——！！

追われているのか、行く手を阻まれているのか。まるで何かに集中攻撃を命じられたかのよう
に激しさを増す雨風。

強烈な青白いフラッシュに照らし出されると、大地さえも揺るがす雷鳴の威嚇砲撃が容赦なく

襲いかかってくる。

「どうなってんだよ、もう！」

大声でも張り上げてないとオレという存在自体を掻き消されそうな、そんな激しき。

こんな事になるなら、原っぱで大人しくしてるんだった。

いや、この嵐ならどこにいたって同じ事だ。むしろ途中で原っぱに引き返すよりは、バス停のある下の方に向かうのが賢明だろう。水門の近くなら、きつと雨風を凌げる場所があるはず。

濡れたTシャツに息苦しさを感じつつ、林の中を全速力で駆け下りる。

視界の悪さに目を細めると、雨と汗の混ざった滴が額を伝って目に入り込んできた。

「くそっ！」

痛みに、ぎゅッと目を閉じた次の瞬間、

「！」

突然何かに足を取られ、体がスローモーションで宙に浮いた。

不意打ちのような不可抗力によって投げ出された体は、空中で思いつきりバランスを崩しオレ

は……

ガツンツ！

鈍い音。火花が散る。

「痛っ てえ……」

鼻から口に広がる鉄みたいな味。地面に倒れこみ、低くなった視線の向こうにダムが霞んでゆく。

死ぬ時ってこんな感じなの？

やだよう オレまだ死にたく ない……

遠ざかってゆく

雷の音が

風の音が

何もかもが 遠ざかってゆく

ダメだ お母さん オレ もう……

降りしきる雨――

いつしか林の中は煙のような濃い霧に支配され、オレは倒れ込んだまま、この大自然と一体になろうとしていた。

力尽き、吸い付くようにベッタリと地面に体を預けると、次第に五感を刺激する感覚の全てが、オレの意識の中から遠ざかっていった。

真暗闇。何にも見えない。ここはどこなんだろう。
 暗いというのが分かる暗闇は暗黒ではない。色で例えるなら、絵の具で塗りつぶしたような黒ではなく、限りなく黒に近い透明なグレーとでも言うのか。真つ暗な部屋で目が慣れてきた時に、薄つすらすらと物の形が浮かび上がってくる。そんな暗闇。
 そう、見ようと思えば見える暗さ。だけど何にも見えない。
 一体ここは……

あ、そうか。オレ死んじやったんだきつと。何かに足が引っ掛かって、転んで。思いっきり頭ぶつけたもんな。

死んだらどこに行くのか。去年、お父さんの事故の後、お墓の前でそんな事を考えたつげ。天国とか地獄とか、別の世界があつて。

いい事をした人は天国。悪い事をした人は地獄。お父さんはきつと、仕事も真面目にやつてたし、天国に行ったんだよね？
 そう、お母さんと話してた。

オレはどうだろう。普段の行いにおいて、そんなに悪い事はしてないはず。悪い事なんか……

自分の置かれている状況がどうで、この後どうなるのか。

暗闇の中、そういう未知の恐怖を感じるどころか、むしろ変に居心地のいいフワフワした感覚に包まれながらヤケに冷静な自分がいた。

「坊や。危ないところじゃったなあ」

ふと、声が聞こえた。ゆつくりとした口調、品のいい響き。

どこかで聞いたような……

「なあに心配はいらんよ。ちゃんと後で帰してあげるから」

この声は……さっきのお爺さん？

「本当は、あんまりやつちやいけん事なんじゃが……さっきの恩もあるからのう。それに坊やは、ぎりぎりセーフなんじゃ」

何の事を言ってるんだ？



「ただ、手続きが少々面倒めんどうだな。一週間ほど時間がかかる。わしらなりにオキテがあるんじゃないよ。まあ、ゆっくりしていきなさい」

だから、意味分かんないよ。

「時間も、全て元の状態に戻せるから大丈夫じゃよう。安心するがよい」
スルガヨイなんて言われてもさあ、言ってる意味が全然……

「ちよくちよく様子見に来るからのう。それじゃあ……」

ちよ、ちよっと待つてよ！ 何がナンだかさっぱり分かんないよ！

「大丈夫じゃ……よう……」

遠ざかる声。

「お爺じいさん待つてよう！ オレを独ひとりにしないでよう！ 待つて、待つてくれよう！」
オレは必死ひつしで叫んだ。暗闇くらやみに向かって、あらん限りの大声で。

「待つて——っ！」

その凄まじい、悲鳴のような叫び声を発しながらオレは……

目が覚めた。

「……？」

ジ———— ミ——ンミンミンミンジ——…

「……？」

ミ——ンミンミンミンジ—— シャワシャワシャワジ——…

むせ返るような熱い空気を、見事にサウンド化したような夏の音たち。つて。何だなんったんだ今の。あれ？ 雨あめやんだのかな。

すごい風かぜと雷かみなりでオレ焦あせって、急いで駆け下りてたら転ころん……

「だあああ？」

辺りを見回すとそこは、さっきまで一休みひとやすみしていたあの原っぱだった。

「ど、どういう事だ!？」

オレは確かにダムを指して、ここから斜面を下っていたはず。有刺鉄線をくぐり雑草の道を抜け、林に入り、途中で転んで。

それで頭を強く打って……

「そうだよ、頭!」

声に出すより早く、両手で頭のあちこちを触ってみるがどこも何ともない。痛くもないし、血が出ている訳でもない。夢を見ていたのか。

確かにリアルな夢というのはある。今回のも、すぐリアルなスリル満点の夢だったという訳か。現に、土砂降りの雨が降った跡なんてこれっぽっちもないし、頭もどこも、ケガしてる箇所はない。

「何だよ、オレいつの間に寝ちゃったんだろ」

全てが夢であった事に胸をなで下ろす。

「それにしてもリアルな夢だったなあ」

大きくため息をつきながら後ろに寝転ぶと、原っぱの草が優しく体を受け止めてくれた。草の匂い。セミの声。見上げると、木の葉の間から太陽の光がこぼれていた。

「生きてるって、いいな」

死んだらこんな当たり前の事も感じられなくなるんだらうな。

お父さんも、もっと生きていたかっただらうな……

あんな夢の後だから余計にそう思う。

今日、ここに来て良かった。かぶと虫は一匹も捕まえられなかったけど。

ここに来るのは今年で最後にしよう。来年は中学だし、かぶと虫なんて追いかけてる暇もなくなるだらう。いつもより少し早いけど、そろそろ帰ろうか。バイクなら時間の自由がきくけど、バスはそうはいかないもんな。

「あれ?」

時間を確認しようと、ケータイを取り出すべくポケットに手をやったが、いつまでたっても探りあてられないでいる。さっきまで、この原っぱに辿り着いた時までにはちゃんとあったのだ。その時に時間を確認しているから、それは確かな事。

「おかしいなあ」

他のポケットもリュックの中も全部見てみたが、ケータイはどこにも見当たらなかった。

「何だよマジかよ。どこにいったんだよもう」

泣きそうになる。

あれはただのケータイじゃない。オレの大事な、お父さんの形見。すぐく大切な宝物。失くしたら新しいのを買えばいいとか、そういう問題じゃない。あのケータイを失うのは、お父さんの思い出を失うのと同じようなものだ。絶対に絶対に見つけなきゃ。木や草の影が少しずつ長くなる。真っ白だった陽射しが次第に黄色味を帯びて、原っぱを柔らかく包み込んでいた。

滴り落ちる汗、汗。

いつの間にかセミが鳴きやんでいた事に気付く余裕もなく、オレはひたすら原っぱを這いずり回っていた。

どの位の時間が経ったのだろう。かなり念入りに探しているにもかかわらず、ケータイはその姿を一向に現そうとはしなかった。

「まいったなあ」

こうしてずっと地面とにらめっこしながら這っていると、何だか警察犬にでもなっちまった気分だ。

もう腰のたるさがピークにさしかかっている。

ズボンの膝の部分は見事に草色に染まり、手も真っ黒。

オレは半ば諦めの気持ちで、腰に手を当て、同じ姿勢にすっかり固まった体を伸ばすべく上体を起こそうとした……

その時。

「何してるの？」

不意に後ろから小さな声に話しかけられる。ゆっくりと振り返ると、そこには小さい女の子が少し首をかしげて立っていた。

薄いガーゼみたいなふんわり白いワンピースに、チカチカで縁取られた大きな花がくっついてるピンクのサンダル。

足元で、こじんまりハの字に寄り添って咲いている。

「ケータイ、失くしちゃったんだよ」

「ケー…タイ？」

ノースリーブのフリフリから伸びた細い腕を後ろに回して、更に首をかしげながら大きな目をパチクリさせる。

よく考えてみれば、こんなところにオレ以外に子供が、しかも低学年の女の子が一人にいる事

「何年生？」
「あー、六年だけど」

「どこから来たの？」

「この子、質問魔かよ。」

「ま、いいんだけどさ。オレそろそろ帰らなきゃいけないんだよな。」

「ねえ、キミ、今何時分かる？」

「面倒臭くなつて、こつちから話題を変えてやる。」

「うんとねえ、さつき、もう五時になるから帰った方がいいって、お兄ちゃんが言つてた」

「あ、そう。もう五時になるんだあ……つて！ ゴ、ゴ、五時い？」

「何てこつた。ケータイを探すのに夢中になつて、すっかり時間の感覚を忘れていた。それに、まだ明るいから大丈夫だと思つていたのに。」

「や、やばいよ！ ねえ、まだバス行つてないよね！」

「一大事だ。そのバスに乗れないと今日中に家に帰れないのだ！」

ところが、焦るオレに向かつて、その子がキョトンとした顔で言う。

「バス？ ここにはバスなんて来ないよ？」

「いや、ダム入口にあるバス停に来たバスが、もう行っちゃったかどうか話だよ？」

それでも尚、キョトンとして首をかしげる女の子。

「もういい！ オレは急いでるんだ。この子の相手をしてる暇なんか……」

「バス停なんてないよ？ だつて、ずっとずーっと下の方までしかバス通つてないもん」

その場を立ち去ろうとするオレに追い討ちをかける。

「じゃあ聞くけど！ キミはどうやって帰るの！」

「歩いて帰るよ」

「歩いてつて、キミン家はどこにあるんだよ！」

「あつち」

右腕をピンと伸ばして人差し指を立てる。

馬鹿げてる。何が「あつち」だよ、ダムの方を指して。もう付き合つてらんない。

「まあいいや。じゃあ、気をつけてお家に帰るんだよ？」

「そう。オレはもう六年生。来年には中学生になる。もう立派な大人だ。こんなところで、小さい子と言いつても始まらないもんな。」

そう自分に言い聞かせながら、フツと肩の力を抜く。

そして何げなく女の子が指差すその方向に目を向けた。

「……」

その指差す方向に、

「……？」

その先には、

「……………!?」

村があった——

——「人間つてのは、本当に驚いた時には何も言葉が出ないもんだ」

いつかお父さんが言ってた言葉。

今まさにオレは、その状況に立たされていた。

カナカナカナカナカナカナカナカナカナカナ…… カナカナカナカナ……



いつしか原っぱに夕闇が押し寄せようとしていた。
眼下に広がる、黄昏色に染まる山間の集落。
呆然と立ち尽くすオレの周りで、ヒグラシが鳴きやむことなく、いつまでもその甲高く美しい
声を響かせていた。

3

「こ、こんな事って……」

女の子が指差す方向。一番最初の夏、一年生の時ここに初めて来た日からずっと見てきたあの
風景が、あのダムが、忽然と姿を消していた。

リアルな夢。限りなく現実味を帯びた、現実なのか夢なのか区別がつかない位のリアルな夢。
突然もの凄い雨が降ってきて、強い風が吹いて。雷の衝撃波だつて本当に生々しかった。

頭を強く打った時の感覚なんて、今思い出しても身震いしそうなほどに覚えている。死ぬかと、
いや、死んでしまったんだと思った。

その位リアルな夢。

オレはついさつき、その悪夢から覚めたばかりだ。

そう、あれは夢だったんだ。今、確実にオレは目を見開いてしっかりと起きているのだ。だと
したら、一体この状況はどう説明できるといふのか。

「一緒に帰ろ？」

気がつくとき、その女の子がオレのすぐ傍で微笑んでいた。

「い、一緒に帰る？ オレと？」

「うん！」

初対面だつてのに、そうするのが当然、みたいな顔してる。

どこことなく不思議な感じのする子だと思った。

いや、この状況自体が既に不可思議なのだが、この子の場合それとはまた別の不思議さと言
うか……

「おーい、さえ子おー!!」

少し遠いところから聞こえてくる声。その声はだんだん大きくなり、やがて薄暗くなった原つ

ばの向こうに人影が見えてきた。

「やつぱりここかあ。ほら、もう暗くなるから帰るぞ！」

やって来たのは、恐らく六年生だろうか、クラスで後ろの方に並んでるオレと同じ背位の男の子だった。

「あれ？ 誰かと一緒なのか？」

白いランニングシャツにベージュの半ズボン。グリグリの坊主頭の下は真つ黒に日焼けした顔。こちらからはその姿がしつかり見えるけど、夕焼けの逆光で、そいつからはオレの事がよく見えない様子。

「ん？ 誰だお前」

近づいて来る白いランニングシャツ。よく見ると、ちょっとゴツイ感じでケンカとか強そう。変にからまれなきやいいんだけど。

「この辺のヤツじゃねーな。どつから来た？」

ほら来た！ 一番答えに困る質問だあ。ああ、どうしよう。

突然訪れたピンチに動揺するオレ。しかし一瞬の沈黙の後、口を開いたのはその女の子だった。

「さえの……さえのイトコのお兄ちゃんだよ。バスでね、さえん家に遊びにきたの」

「……おーそうか！ さえ子のイトコか、都会から来たんだな？」

オレがこの子のイトコ？ どうなってるんだ？

思いもよらない展開に、ただただ意味不明な薄ら笑いを引きつらせるオレ。
もう何が何だかさっぱり分かんない。

「よく来たな！ 俺はケンゾー。さえ子ん家の隣りに住んでるんだ。よろしくな！」

ランニングシャツ君は、真つ黒に日焼けした手を差し出した。

さつきこの子が言っていた『お兄ちゃん』は、どうやらこいつの事ではないらしい。取りあえ

ずこのケンゾーってヤツ、見かけによらず友好的で良かった。

「オレはユウタ。こちらこそよろしく……」

戸惑いながらも握手する。ケンゾーの手はでかくて大人の手みたいだった。握る力も強くて、オレの手を飲み込んでしまいたいそうなほど。こいつとケンカなんてしたら絶対勝てないだろうな。そう思う。

「お！ セミか？ カブトか？ 何匹捕まえた？」

そのケンゾーが、坊主頭をボリボリ掻きながら虫かごをマジマジと見る。

「あれ？ カラッポじゃねーか。あーこれから蛭捕まえんのか？」

「いや、かぶと虫とりに来たんだけど、全然ダメだったんだ」
「何だよ、カブトならいーっぱい居るところ知ってるぜ？」



ミヤマとかノコも結構いるんだ」

「マジで？ ミヤマもいるの？ すげえ……すげえよ！」

つつい興奮してしまう。オレは、かぶと虫が大好きだ。でも同じくらいクワガタも好き。中でも、あのゴツイ身体からだのミヤマクワガタが大好きなのだが、最近じゃデパートくらいでしかお目にかかれないほどの貴重品きんじゆうひんだ。

そのミヤマが「結構いる」なんて！ これで興奮しんぷんせずにいられるかってんだ！

「いいなあ、そんなところあるんなら行ってみてえ！」

「おお、任せとけ。明日にでも連れてってやるよ！」

オレは、自分の置かれていた状況なんか完全に忘れて、今会ったばかりのケンゾーとすっかり意気投合いきとうごうしていた。

そしてその横には、オレたちの様子を楽しそうに眺めるさえ子の笑顔。

「良かったね、ユウタ君」

ニコニコしながら言う。

「なあ、そろそろ帰ろうぜ？ さっきから蚊かが寄ってきて鬱陶うっとうしいんだよ」

ケンゾーが腕や足をあちこちピシヤピシヤ叩く。

原っぱは、もうすっかり暗くなっていた。

「ね、帰ろう？」

「う、うん……」

オレは、やたらと説得力のあるさえ子の笑顔に諭なごされるようにして、原っぱを後にした。

すっかり暗くなった山道を、白いランニングを頼りに暫しばらく下くだっていくと、少し先に頼りないほどに小さく、おぼろげな光が二つ見えてきた。

「あ、お明神様、もう灯あかりがついてる」

「ああ、もうすぐお祭りだからな。準備とか始まってんだろ」

隣となりを歩くさえ子の呟つぶやきに、ケンゾーが前を向いたままぶつきらぼうに答える。

その小さな光は灯籠とうろうの灯あかりだった。神社らしき高台へと続く石畳いしだたみの階段。その石段を挟はさんで両側にある、やはり石で出来た灯籠。

中の短いロウソクが、辺りの暗闇をぼんやりオレンジ色に照らしていた。

今歩いてきた山道と、この石段の上がり口がぶつかった道の先には、大きな鳥居とりいが立っていた。本来なら神社じんじやの境内けいだいへの入り口になるんだらうけど、ここに迷い込み、初めてこの鳥居とりいをくぐるオレとしては、丁度村への入り口のように思えた。

鳥居をくぐり、拓ひらけた道を歩いていくと、あちこちの家からもれる窓の灯あかりが目についた。所々にある水銀灯すいぎんとうには、その青白い光に魅みせられた虫たちが、この時を待ち望んでいたかのように盛さか